

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 24 日現在

機関番号：27103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370323

研究課題名(和文) 英国初期印刷本期における『狐物語』の本文生成と受容に関する研究

研究課題名(英文) A Textual Study of Reynard the Fox in Early English Printed Books

研究代表者

向井 剛(向井毅)(Mukai, Tsuyoshi)

福岡女子大学・文学研究科・教授

研究者番号：40136627

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、中世後期から18世紀にかけて広くヨーロッパに流布し、様々なジャンルで受容された<狐物語群>のうち、(1)中世オランダ語から翻訳・受容された英語『狐物語』(/Reynard the Fox/)の本文生成と派生のプロセスを、キャクストン版(1481, 1489)からド・ウォード版(1499, 1525)、ピンソン版(1494, c.1506)、ゴルティエ版(1550)を経てアルデ版(c.1600)に至る諸版を対象に調査・検討し、新たなステマを提案したこと、(2)各印刷・編集者による本文と書物のつくりを社会・文化的文脈に位置づけ、受容史の観点から解釈したことである。

研究成果の概要(英文)：This textual and bibliological study of the English /Reynard the Fox/ has produced two main results: (1) to propose a textual stemma of the eight different editions of the /Reynard/ from Caxton (1481) through Alide (c.1600); (2) to make a socio-cultural examination of the textual and paratextual characteristics of each edition and to make an interpretation of the targeted readership of each edition.

研究分野：中世英語英文学

キーワード：狐物語 書誌学 書物文化史 英国初期印刷本 ド・ウォード ピンソン キャクストン

1. 研究開始当初の背景

W.キャクストンは中期オランダ語の『狐ライナルト物語』(Die Hystorie van Reynard die Vos)(1479年)を英訳し、1481年にReynard the Fox(『狐物語』)として出版した。当時のイングランドでは、本作品はフランス語による写本で知られていたが、キャクストンの刊本により広く読者を得て、1489年には再版が出された。その後も、キャクストン版をもとにして、ピンソン版(1494年、?1506年)、ド・ウォード版(1525年)、ゴルティエ版(1550年)、アルデ版(1600年、1620年、1629年)、オールトン版(1640年)、ベル版(1650年)が踵を接して初期印刷本期に出版された。

またESTC(初期印刷本書誌)の記述によれば、1800(?)年のハワード・エヴァンズ版に至るまでに、更に49種もの版が世に問われている。いずれの版も<動物譚>として大括りにされるが、時代の思潮に応じて、各版が意図した顧客・読者層が異なり、それらが本文(テキスト)の編集ぶりや版型、挿絵、目次と梗概、序文などの書物のつくり(パラテキスト)に反映されている。ESTC記載の書誌情報はBlades(1861-63)に依拠し、Blake(1964, 1965)とVarty(1980)の修正を得てなお誤謬があり、徹底した本文校合にもとづく記述と本文生成の解明が研究史の上で俟たれるところである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中世後期から18世紀にかけて広くヨーロッパに流布し、様々なジャンルで受容された<狐物語群>のうち、

(1) 中世オランダ語から翻訳・受容された英語『狐物語』(Reynard the Fox)の本文生成と派生のプロセスを解明し、ステマを確定すること、

(2) 各印刷・編集者による本文と書物のつくり(make-up)を社会・文化的文脈に位置づけ、受容史の観点から解釈すること、である。

調査の対象は、キャクストン版(1481年)からベル版(1650年)に至る初期印刷本期の諸版とそれに関連する大陸版(オランダ語ゴード版・低地ドイツ語リユーベック版)に限定する。

『狐物語』の研究は3つに大別できる。英語史の視点からキャクストンの言語を記述する研究(Kellner 1892, de Reul 1901, Blake 1964, Gerlach 1997, 谷・尾崎2009)、動物叙事詩や児童文学のジャンルとの関連から文学的に解釈する研究(Varty 1967 and 2000, Lair 2006, Mann 2009)そして本課題が関係する書誌学的研究(Blades 1861-63, Duff 1905, de Ricci 1909, Mish 1953-54, Blake 1965, Varty 1980, Menke 1992, 木村2001, Hellings 2007, Tsuji 2012)である。

本課題の先行研究として挙げるべきBlake(1965)の研究は、調査の範囲を限定し、キャ

クストン第1版(1481年)からゴルティエ版(1550年)までの5種のテキストを比較校合し、本文派生のステマを提案している。

しかしBlakeが主張する派生図は、テキスト全体の調査にもとづく確認がなされていない。確認・補充が必要とされる一例として、申請者である向井と本研究を補助する大学院生Tsujiの調査(2012)によれば、比較の対象外に置かれたピンソン第2版(?1506)は、ピンソン自身が出版した第1版(1494)以外のテキストを参照していることが判明している。ESTCは、第2版を「中期オランダ語テキストの翻訳」と記述している。はたして、後に国王印刷家(King's Printer)となるピンソンは、直接、オランダ語から新たな翻訳を試みて本文を生成したのか。それともこの記述に誤りがあるのか。先行する版、或いはオランダ語作品との比較校合が求められるところである。さらに、Varty(1980)やMenke(1992)は、それぞれ異なるステマを提唱しており、こうした派生研究の不十分さを本研究において精緻化し、対象を初期印刷本期全体に広げ、本文派生の系統図を完成させる。

具体的には、以下の観点を立て調査・分析を行う。

- (1) 底本であるキャクストン版に比べ本文に崩れ(textual corruption)が観察されるピンソン初版のテキストの特徴を明らかにする。
- (2) ピンソン第2版(スコットランド国立図書館蔵ユニーク・コピー)の本文上の特質を解明する。ピンソン第1版と本文及び書物のつくりの上で、いかなる差異が観察されるか、それを記述する。
- (3) 現存するオランダ語『狐ライナルト物語』(ゴード文書館蔵)とピンソン第2版の比較校合を行い、ESTC記述の是非を確認する作業を経て、ピンソン第2版の底本を確定する。
- (4) Blake提唱のステマを1650年のベル版にまで広げ、かつVarty(1980)やMenke(1992)が提案するステマを批判的に参照しながら、本文校合にもとづき派生図の決定版を作成する。
- (5) Mish(1953-54)は、アルデ版(1600年)が複数の版を参照した複合テキスト(composite text)である可能性を指摘しているが、それを2つのピンソン版を視野に入れ、本文に加え、挿絵、章立て、梗概を比較の観点にして、参照テキストを確定する。
- (6) 各版、とりわけピンソン第2版とアルデ版の本文づくりを、顧客層及び出版当時の時代的・社会的背景と関係づけ解明し、狐物語のジャンルの揺れを解釈する。

3. 研究の方法

本研究の基本は、調査対象とする諸版のテキストを比較校合し、本文の異同に照らしてステマを作成することである。主要なテクス

トは EEBO (Early English Books) で入手可能であるが、不可能なテキストについては、直接、所蔵図書館等を訪問し、調査を行う。

最新の書誌情報提供は、ESTC の改訂に当たる John Tavor (米国ハンティントン図書館稀覯本長) に協力を仰ぎ、本研究の鍵となるピンソン第 2 版については、所蔵先 (エディンバラ、スコットランド国立図書館) の図書館員からの協力を受ける。加えて、ヨーロッパにおける狐物語群研究の第一人者である Kenneth Varty 教授 (グラスゴー大学名誉教授) からは、所蔵するテキストの貸与を受けた。

4. 研究成果

本研究を通して、以下のようなことを明らかにした。

- (1) ピンソン初版のテキストは、底本であるキャクストン第 1 版に比べ本文に崩れ (textual corruption) が観察される。自身の初版に基づき、改訂の上、再版がなされたと考えられるピンソン第 2 版は、現存する箇所 (8 ページ) を比較校合する限りにおいては、Blake や Mish の提案とは異なり、ピンソンの初版に依拠せず、キャクストン版を基に新たに本文を組み上げたと考えられる。
- (2) アルデ初版 (c.1600) は、キャクストン・ウォード・ゴルトイエの本文系譜に位置づけられているが、本調査により、加えてピンソン第 2 版をも参照した複合テキストであることを、本文、挿絵、章立て、欄外教訓の比較をとおして明らかにした。
- (3) ピンソン第 2 版とアルデ版の本文づくりを、顧客層及び出版当時の時代的・社会的背景と関係づけ解明し、狐物語が児童文学として受容されていく様 (ジョン・ロックが教育論で言及) を指摘した。
- (4) 17 世紀には続編パート 2 とパート 3 が編集出版されるが、これらの売れ行きが芳しくなかったと思われる続編がパート 1 と合冊され販売される戦略について、現存コピーの合冊本 (Sammelbande) から考察を加えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

Tsuyoshi MUKAI, 'Was W. Thynne (1532) a Good Reader of Henryson's *Testament*?', *Studies in Medieval English Language and Literature*, No. 30, 2015, 1-14.

[学会発表] (計 4 件)

向井 剛、都地沙央里、「17 世紀『狐物語』の受容 - イリノイ大学図書館所蔵コ

ピーの謎」、日本英文学会九州支部第 67 回大会、2014 年 10 月 26 日、福岡女子大学

向井 剛、「ロマン派とクリセイデ受容」、九州・山口イギリスロマン派研究会、2015 年 12 月 12 日、福岡大学

Tsuyoshi MUKAI, 'Syon Abbey: Use of Print as an 'immediate' Medium for the Religious Laity', 日本英文学会第 89 回全国大会シンポジウム、2017 年 5 月 20 日、静岡大学

向井 剛、「研究方法を見出し、研究テーマと出会う」、日本中世英語英文学会第 33 回西支部研究会特別講演、2017 年 6 月 3 日、関西外国語大学

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向井 剛 (毅) (MUKAI, Tsuyoshi)
福岡女子大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40136627

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

都地沙央里 (TSUJI, Saori)

福岡女子大学・大学院文学研究科博士